雲妙間雨夜月五

へ13
荒
19小
小

へ13
195
5

駿本忠

大

於13 193 3

冷笑し。朝茶を喫し死するものゝ多し。世の者爺婆しハ毎朝より茶
でもあるとゝ程細く丁度と責問ハ丁ぬらゝ。そひ誠ひ仮
細あんやうもちゝび僕こゝ水を仮入れ。こゝ烹る茶
を進ぜる。かゝるうまゝ。ぜひよゝ。只あるハ。僕面のゝ
ゝ茶を喫ゝ。試みゝし。ゝゝの茶ゝ毒あゝ忽地ゝ死ん。ゝゝ
へ。疑ハゝ甚しゝゝとらゝふ。ゝゝの志ゝゝ。かゝゝ丁ぬハ。大き
やゝゝ茶碗ゝ。ゝゝゝ茶ゝ仮入れ。吹さゝ丁ゝ喫と半ゝゝ
ど。忽地面土のごゝゝ。叫若一声叫び目めゝ。九孔ゝゝ血漬ゝ。
撞と顛びゝゝ死ゝゝる。蓮紫いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝゝて。茶ゝ毒ハゝゝゝ。ゝゝ覆ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ。目筋の中へ係ゝゝゝ。果ゝゝ青き猪婆蛇の煮焼さと

水の声
多賀
ちよの
ほとゝ
きす
其角

るが。茶殻ばかりを出しつべ。衆人ものとく驚き呆れ。ゐる毒虫の
入りて茶碗もちゐで。飲ん〳〵飲〳〵もさ〳〵なる。主従の幸ひ
ふ。この猪婆蛇。筧より落ち〳〵水桶の中ふ流れ入りゐるを。まえのにお
ちゐしつべ。丁攻ぎ。茶釜ふ投入れとあぼ〳〵。彼の〳〵狭婆
蛇ありとちらべ。ひろふ〳〵ちらの茶をば喫べ〳〵ば。かまふ雄と根。
誰と仇とせんもぶきすり。何ぐすも過世の悪業ぐと。ちひ禍なべと。
さぐまらひ慰ゐる。蓮葉ハ。ぐめ〳〵暁ゐ。さくハきの人のなぐれふ。
ちぶ桃の枝をふわ〳〵ちを。揮落〳〵なる青狭婆蛇のあやま
ふ覚ふ落ち。今朝丁攻ふ投ちられ。ちち〳〵ふなべちをんちふ
紀出ちちべ。の絶たふ令死隕ちぐちしを。果報ハ濱ちまちく〳〵ふ
常言ハ空〳〵ちべ。さく〳〵ちを危ちしと。ちぐどちをのちハ。ひ

夫暴ふ死をちちく。子とちふのもちを家の。ゐほそをを禁〳〵ちく差夫
何とせんとちを口頭入めぐちの。袖の雨晴ちまちぐさやかりちち。
ひくてゐべきふあ〳〵ねべ。人をのちく主君木賀どの武泰が頓死
のちを焚えあげち。是彼の扶助をはちく。野遺ちち形のぐく
ちり。学ちく。丁攻ぐ屍ハ。それが由縁のあのふちをどちふ。木賀
元帥も。ち命五を惜ちそひちく。近江へ人を走ち。二ノ二時
武章を呼びちて。ち督のちが中ふ出ふと叮嚀ふ焚えちく〳〵ふ
けちど。蓮禁ハちれ〳〵めちふハちひもちけど。夫が死ちを。ゐの幸
ち。ちの便宜をはちく。西僧をちべ家ふ呼び迎へ。過ふ〳〵秋のえちそ
ね養を治り慰ぐや。とちひ〳〵ちべ。ちれとちハちふ〳〵ふ近隣後ちく
ち。無名寺の雷神上人とゐちんハ。ちふ稀ちる善知識ふあちち

とらで。かゝる名僧の引接にあらざ。亡魂もいかでか仏果を得ざらんや。
翌日はや初七の逮夜にあたりて。手を下すが為に彼神僧が招
待しける。びてんせとらふ。人ゝまちとゝま二僧で。彼僧を蓮葉が意中
の人とふはむかひもうけを名々すべありと意て一人のこらず刹下郎を率
名寺へつかはし。縁由をしらせける。その時雷神法師は奸計をめぐらし
忽地山院の住持となり。白雲黒雲ともに昼は口に弥陀をとなへ
輒夜は腹に酒肉を葬る。志のぶしよに非法の歓楽を尽とせし。
ある日人来りて。木賀光輔が家党。伊原太郎五武泰が浪客
亡夫の為に翌の夜招待せまほしきよしいふその言語のと叮嚀に
雷神法師も心中よろこび。木賀は此ころふ名ある武士なり。今その
郎党に因ば主の光輔に讃るゝもまことにしかるべし。と[illegible]

べたるを疾くその人を呼しね。さる程に蓮葉は。よろづその[illegible]
して次の日彼此の人に酒飲せ飯くはすべきしたくをなしまた登の中へ
[illegible]まし。其まちに久しき悉く用ゐし。さらに羨ゆる雑扮し。衣裳を被
あはて彼人に近づきしと待まらりき。是はさてかれ伊原二郎二郎武章なる者
年の冬信二郎途遠が鹿栗にあたりて。冤枉の縲絏を脱まいらせしとぞ
らさんその人の蔭を蒙りて。観音寺の塔中に伴ましけるがふかく
その恩恵を感謝しつゝ。ただ其人は牛を売る賊僧を憲ふしく。妻
の元江が為に冤を雪で。弟のぬれ衣を乾べしとうる。強園はあかち
あくる心を竭して遍歴をといくども。さらさらその往方はしらず
怒ぎられ春も二月になりぬるが。既に貯禄もつきはてければ
うけしかば底倉へ赴きて。兄武泰に縁由を告なるしその[illegible]

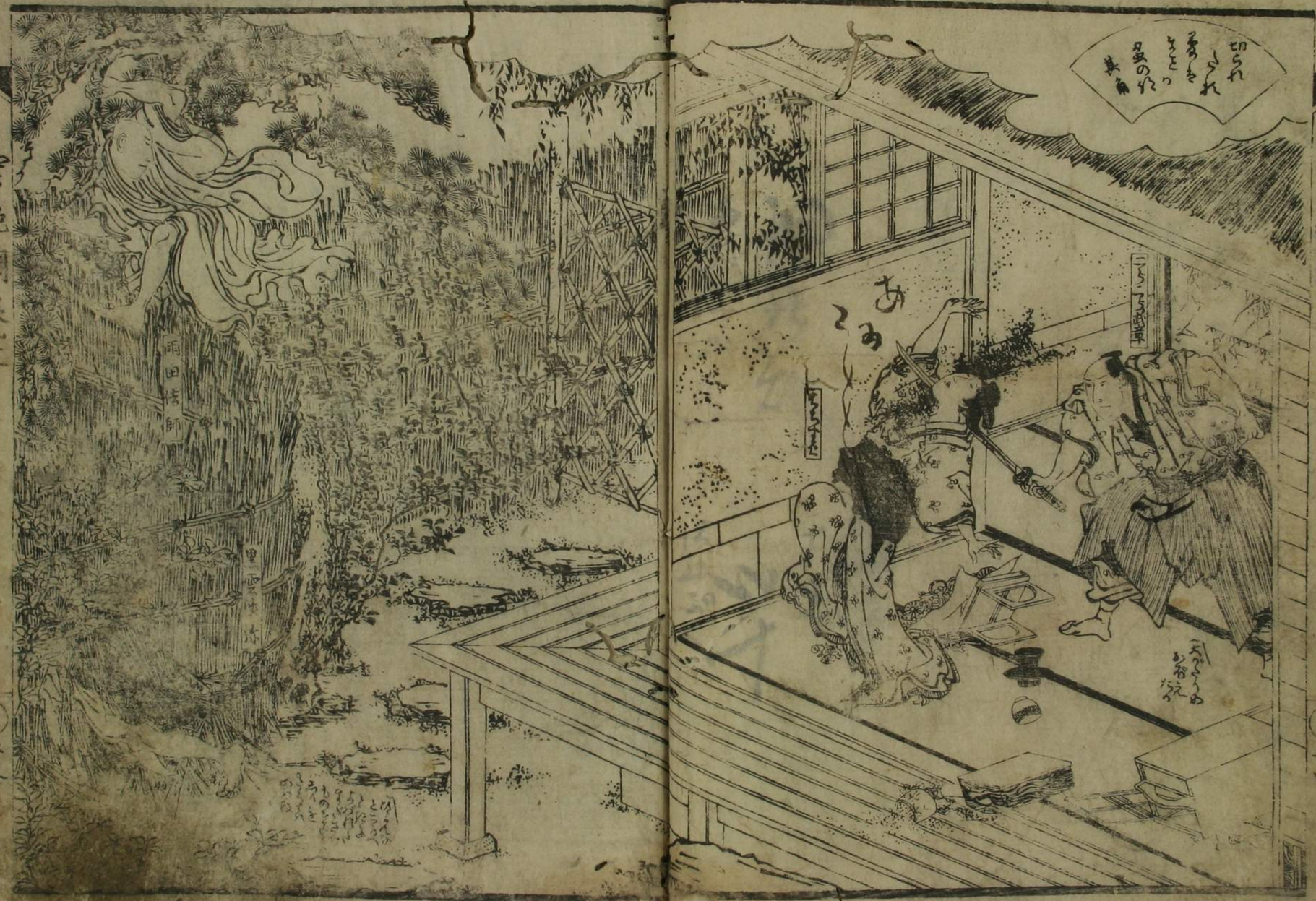
る。風志を果さんものとと願思し。絲生のくづめを近江湖を
て。夜を日に継ぎ走りて行く。三月七日の夕べ比ひの鹿倉
樓より一里ばかりを隔てる。山里なれば家居まばらに
とうう頻ふ忙しくとえまばら村鶏尽く死する樹の梢より烏鵲群居
てのとかしがましくうく声の。打とゝ耳をさゝり。人相の撞も
ようやうゝ悲しく。忽ち肉動たる。神を引入るゝやうなほ
えゝ。ちぐ〜彼死を見えうつ。ある山のとゝ。子どもらが
うくよゝうゝぬるや出来ん。又ゝ兄の家に幸するやあり。
さゝ〜ぬたゞゝぬ烏の啼ざまるとゝうどち。天連忙し〜く
いそぐ。日は既に暮て天さへ結陰。七日の月は影もえせね
ど去年来し時の雉枝。七枝居大が面教しく。葉を

ゝう。武章つと入れば。ゝゝ兄は恙なく〜ふ一郎
とて糸りのくと吸門が蓮紫との声をのゝ〜ゆめゝく。恙襍の間
さし歌。周章ゝ。套房のくふ走りゆく。猛き紅粉に笑ふ。
喪服を被更ゝ〜やくゝ出叔く来ひつるゝ〜ゝ
と引ゝ。武章は嫂が衣服のいろの忘れをえゝ。さてゝ兄は
世武者ひよりと猜しゝ。端ゝく〜問ど草鞋を解とゝ〜
ゝ寒暖を述。又ゝゝ来いる徐氏が横死子どる
ちぐゝの死生ゝ〜ゝ目を押拭ひ。空に向ひ兄
牙は。過ぎ〜ゝ〜ゝ。寂〜宛枉に係りて妻を喪ひ。ゝ別れ
ちゝ草ゝ〜ゝ。ゝ来ゝ〜ゝ〜ゝ夫は節ゝ
朝頻死ゝ果ゝ。ゝ家は如此〜箇様〜〜ゝ吉枝婆

蛇の如く下攻げて。かちもなく物うち敷き。武章ハ中も果て。拘を
折らく哀悼の涙堰あくどけらくそふよ兄が最期の為体疑ーた
るもあまつば。その仕ちぶく同諦るふ。それとそふうも臣。ぶつぶこいん
かくせんと。道をぐくのとろげくもこてふ至くうるる休を愁傷ゆる
うさうう。ゆまかくて武章ハ。中紀涙を拭ひおさめく。蓮袋が頃日
の嫌うるぐさ公竭ーを悼ミ笑え又数回嘆息ー。くふとでもエぐ臣。
兄の亡日のそひそ中。今宵初七の逮夜とハせめく夜ーくもふ回向く
さめとうひかけてぱとゆ仏立も力るく。めくる家廟の亮陽も。香ろ
煙ま賦ケーー。そぐとうくを秋原の席の位牌ようち対ひ。そ人限う
うに説稱名の声幽うう。浩而み雷神法師ハ。黒雲をわく外面ま
立在ぐ。蕉火をあげさく。門柱ろ表札を仰ぎ瞻つ。とくとうう
ふ黒雲ゆがうく走り入り。愛名寺ま臨せう。と呼ぶ。あぐ蓮
ゆうびとろう慌ぶ。あとハそくどもさくぬるりーちく出迎へつ。客房ま
秀引。黒雲をその後方ふゆふーく。茶をとぬうち令咲くいふゆうこう
猛ゆうしく入ぶくぶしみうちあうーぬつぐ。ゆひつるぐ黍ぶ。とハ声も。
面影も寡くうぐわぐ。の嫡婦ハ。神崎ふくゆひ人つる。蓮袋ふこと。
ふ雷神。怠心胸ちくぐ。ふくも同うゆく。言語とくうま
袁ーう。同手剣ゆくくとれをふまぐ蓮袋も又物ひうげゆく。強ふ袁。
庖福の方へ退ゆーゆふゆう。稀ゆる便宜を紛く。彼人をなまんど。めや
ゆくみ。武章とくふ来くしうば。うちとけてハ相語ぐ臣。愁ようと選ぐ
ゆくうまんと琴思ーく。家氣のとるるる。襖の間ま顔さーー人ーー
ハ。ゆも去年の冬。指ゆひる愛名寺ま。此度入陵ぞゆひる。雷神上

へハ。掛俳諧する。何ゞ寺うち来ぬくり。とぞひくる。法名ハ両啓と
ゐれ名ハ。道徳ゑ常ゑ徳ゑ。近曽先住の寂寞を頼めぬひ
抜る。里人ホ仰ぎ尊ミ。毎日ゑ詣るものいと多ク。かゝる者智識
ゐく世とゐれが。今宵ゐ人の為ゑ抜を乞ひが。只今来ぬひつゝく。
而ゑ彼而ゑ糸ゐ。労ゑ生ひ。武章えくりて。そへくぞ
抜結ーぬひゐる。さゝゞ対面いさぐゝと回答ーかを門抜く客房
ゑ到ひ。雷神ゑ対ひくいかゆ。某ハ今宵ちゐざゝ。ゐれ人の為ゑ
先ゐる。年来近江の湖田ゑ住ひく。伊原二ゞ二年ゐ為ゐ。
寺勢繁ゑ。ゐハをぐこゐふ。法只を向ちゐ。ゐ。崔躍ゐゐゞ
とゐ。雷神ゆゐ。さそハ本郎五どのとゆゐんの舎弟ゐる。愁傷推
量ゐれゐゐ。其而ハゆゐりゑ端ちゐくまぐちゐへゐて。焼の門と思

向ゐ人先ゑ懐ゐ面をゐ。武章侍とえさく。小勝立ゐ。ゐつ刀ゑを
ハけ。めぐゝしや。去年の九月失律ゐ。八町縄ゑの牛市ゐく。假初ゑ面を
あハせ牛盗人いゐぐゐれハをぐゝぞ。汝小幡の商人物右衛つと
ゆゐんゞ黄牛ゑ杜瑞ゐいて。ゐれゑ賣ーゐ。ゐゞ家忽地連係せゐれ。
妻を喪ひ子どもゑ別ゐ。いくゐの艱苦ゑあくゐる。ゐゑ汝ゆゑゐれば。
山を伐ゐ。世ゑ焼枯ーゐても。索あゐぐゆへ。とゐひつる。風望絶ゑ空ー
うゐば。えゐゝぐゐ。ゐ今あひぬゐゐ。妻子の仇ゐゞ。ゐの仇ゐんゐゐと思ゐも
あへぐ。跳ゐつく組んとゐれば。雷神ゐゐ怒ゐ。ゐゐ退つ臂ちゐる。
短繁ゐゐく投著ゐ。武章ゐ早ゐゆゐ。ゐを反り。刀を抜き切り拂ゐ。白又
の光ゞ電の閃くゐ異ゐゞ。如法闇夜のゆゐ打。黒雲ハハ空ゐ
足音さゆゞと這廻ゐ。眼前ハ突出を刀光ゑ。鼻をゆゞめゐ浮彫ゐと


雲絶間巻三
雨田吉郎
雲絶間巻三

呼ふ不ろうふ物ひとぞ。走路さぐぬるおもあと。蓮祭ハかしらもちゝ。
高杯よ果子を盛庖福ろうりく。まるとく。ふつをうく。周る。襖のかど
黒雲が。驀直よ逃生る。武章ハ逃ざと。飛うつく。丁と砍る。圍
前方て蓮塔ふが。聞ろり。乳の下さぐ。ぐとさぐんど。砍さげられ。阿呀と叫び
て仰さそうふ。倒ろ。音とのろ。ものもふ。庭ふも。撞と地音。跳踊ろ築墻
のあるさえ一声。叫ゝと。公考ふハ正よ雷神。うれのあふぬうあるを。圍ふ。ひ
惑ひく。嫂ゝ。ちゝぬ。屍を踏越。さそハ只今。砍臥ろハ。伴僧あく
ろう。家家の灯燈を借りてやえん。庵福の燈火をりて来ゑ。阿嫂
阿嫂と喚ろうよりて。ろうれびいとぐる。赤よ赤ろ壮士ぐ。血刀引
提く外面へ。喘くぞ追くゆく。雷神ハあとえまでも。屍風の背よ躲れ
居く。息もとぎしが。蓮塔ぐ。阿と叫びろ声あく。既ぐ。伏せられ

ハ。彼奴人ろぐゝと猜して。ろよ足と失ひ。武章ハ黒雲を追。兎く。外面
ろ。ろう。出しぐ。ろの隙よとく。牡く。脱去て。そのもう。牛ぐ。貴ろるゆ。かく
殺見ろ。ろの形よ足をとぐめぐ。怪癡ろ。奴ふ撞見く。宝の山よろうぐ。
ふと。空くとるうとろ。哮を。圍よ紛ろく。役ろう。ま。ゆ。ろ。武章
黒雲を追。兎ろ。遂よ墓所よ追逼う。逃ぐと。打てかれぐ。黒雲
声をろうろく。賊ありくと。ふろる。報よ。白雲。ゆく。樫の桿様を横ろ
火。寺男とろく。ろう。出るふ。伴の男ハ。武章が。閃ゆ刀の光よ。驚ろ怕ま。
恐怖よ。逡巡し。藪の中ぐ。躲ま。ろる。されど。二人の悪僧ハ。ろ。ぐ。えあ。
ろれば。物ろ。ゆ。せど。防ど。戦ハ。黒雲ハ。ろ。ろる。卒都婆を。抜ろ。ち。
ろう。揮。左右ろ。引。ろ。で。雑仆。さん。と。聞ろ。その。隙よ。雷神ハ。宿。あ。
金を。ろく。ろ。囊の。内ハ。ま。又。慌。ろ。逃去。ぐ。ぼろ。ちろる。紀里人ハ。ま。

天福元年
眞信普安
八月十日
義軍信士
覺蓮居士
元弘三年五月日
大舘宗氏之墓
新田義貞

酒井抱一
ちくらん

頭はらを敲く。只今宵夜寺に剛盗入る。防禦に林はとゝ〳〵あくゝゝ。
あくひゆくと叫び笑ひ。ゆゞゝとてゝゝ逐電を。里人ホハ。の声に驚て寤て庠
と起ゆみく蕉火をゝりてゝ長柄の鎌を含く。宵夜寺へまう来つ。其処う
とゝうと散動めるく。染墻の外面ゝり。蕉火をるくはめげ。盗賊を逐ー
のふる。衆皆加勢のるふまきとゝ。ゝゝゝ。その武章ハ火の光ゝて拄ゝ
悪僧ホをゝるふ。當の仇人ゝあゝざれが。ゆゝゝびちひ惑ひつ。さてハ獣に敵
什ゝるハ。雷神ふゝゝあんゝ。悪僧ホも。支黨ゝゝゝるのゝう。里人ホ
感されて号信ー。却ゝゝれを賊ゝゝゝ。かまび日今ゝの正ゝてひ
ゝたのひ解ゞ。妻勢を敵ゝゝ人をる報ー。れも傷られゝハ慮の
ざるふ初ゝう。ゝゝゝびゝゞ立ゝゝ。彼賊僧が死せゝゝ。ゝゝゝゝ
め。明白ゝ領主へゆえあげゝ。ゝゝゝ

跳り出るゝ悪僧ホも。その本事ハ今ゝゝゝゝ。ゝゝゝ
武章ハ南門ゝり走ゝ。ゝゝゝ五ゞ家ゝ立ゝるゝ家房ハゝ暗ゝて音
もせゞゞゝハ不審とゝひゝゞゝ。内ゝゝ入りてゝゝゝ蓮禁をゝゞゝ。
ゝゝれてゝ出ざるゝとゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ撥ゝゝ。庖温の燈火をゝ
ゝゝゝ。蕉ゝてゝる人をゝゝゝ雷神ゝハゝゝゝ。嫂蓮禁ゝゝゝゝ。
ゝゝゝ驚ゝゝ。ゝ燭を撲地ゝゝゝ。ゝゝゝ集の間ゝゝゝ。ゝゝゝて
ゝゝ陵ゝゝ。ゝゝゝゝゝ灯をゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ袖ゝゝゝ
滅ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ灯をゝゝゝ。蓮禁を抱ゝ配て。
ゝゝゝゝ勇ゝゝ炎ホの深痍ゝるゝ。既ゝ稀ゝゝゝゝ殺ゝゝゝゝゝゝ
忙然ゝゝゝゝゝ天をゝゝ仰ゝゝゝ嘆自ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
命ゝる。世ゝゝゝ為ゝれば。貧ー中ゝゝゝゝゝ竭ー。ゝゝゝ養ゝー牛ゝゝゝ

を喪ひ子よりうれしう思ふ兄者も。その死人の数に入りぬひねくさく嬉さ
ふ。今宵こそ環會し。賊僧ことひ悔し。嫂を教さ〜ろへいろの庸我
都美の神の示為で。それは十二分の理ありとも。かくて罪を脱まがれ。兄儀〜自
殺をえおとと〜刀の鞘のまを。ひとうにぎ。又やふ申。縁故をいろどて死もるとえい。死後
その汚名を雪るまこと。かうなば。彼支堂の悪僧を。引ろふべうしに入うそ
這奴ホも虚〜と。彼示あハ居ぞ〜ぶ。ぞ。ふとひろがふ。その為体をえでやとて。
門を固く〜。ぬ〜び。各寺よりゆえ。外面より張ひろ。さる祝よ黒雲
かしこ。じさ〜勇士の志刀先を脱ま。密よ白雲よ甲夜のよ代告ぬ。既よかくの
ぞ〜まれば。彼人ハ後難ぬ。ぶとひく。途ろ逐電ぞろ。そそ。人よられぬ
間よ。〜影をかくせとふ。白雲ぬ〜。大よ騒ぬ。慌忙く黒雲〜もよ。臂近
ろる衣服賽張を舎〜。これを幣員ぬ。地ろ〜。逃亡ぬ

とも〜〜ど。盗賊ハ追ひ失ひつ院主ハ何示よ生ろ〜。入ヤそ。庭ぬ
ろる法師さちさ。猛よえざるとそとろを。ろね。彼示ろや約ろ。其示ろやあん
〜。めと置〜〜。ろるそ。ぞを武章ハ。垣のろるこみのれはさ〜。さればこそ。ろぶ。ろま
違ね這奴ホとぐ〜逃亡ろうハカ及ばど。これ今ろの迹を追ふて。ろの
地を立ろるとえハ。人ろるふ。嫂を殺〜。身を躲せろといろん。ふ〜や風
志を遠ぞ〜。怨を泉下よ遺ろ〜。過世の悪業ろ〜ばそれもぞろ〜。
常言よ。おぼめ物とろ。乱離の人とろろすろれという。夜もあけば。
木賀どのよ。ぬえ。面縛〜〜。罪を俟ん。さいく。近ぬる子どもらが。母
を喪ひ兄ホ捐ろ。ぶぼそ〜。ぬめるべえ。今又ろが身死せろと。ぶ〜ぶ。
ぶやホ〜ん。かく〜や。ホ〜ん。とろひゆるさ。恩愛のろの面影ハ目ろえ〜。
猛死ぶ。ぬろ〜ハ果五臓を絞る迷恨の涙玉ちる袖ぬ〜寒く。春ろ

夜あれば短くて。とや思ひ〳〵し明よ。かくて其章は。ゆくゆくその家に立
ありく。一五一十を書写めさく。近隣枝に告く。頃主に所その裁断に任せん
とく。蓮紫が亡骸に衣をうち被せ家家に到りく。父母に〳〵五が法
名を稱生る人に物いふごとくその首尾を審に告く。その暇をとり。背門の遣声
を引あるまじ日来ち〳〵五が養押し〳〵。雪の山と名つけし白旌の雪。鳥紋の
中にあり。あじが羽をうりて後は。くろ〳〵餌を飼ざり名。靖羽の光澤を去
年えーさまあらで。気色いと哀れ。とれも又名人の像見とくば彼蘇
ようち野ひこりの。時鳴遠く書を寄せく。蘇武が十九年の苦辛を
げ告しとりは。巻を巻る寓言みもせよ。陰崖黒柏嶺の蒼鷹。白蛇を殺し
寃を雪さる例もあり。汝は原勇武のもちる。我あつく〳〵ねくめるを
教さぞ。明朝放ゆるとよ。それが赦ゆくかさる南ひて絶田絶と絶ぶ。

一朝蛇と化さとは。三枝の礼をいはるるべし。それより手でさそる恩
ることいくばくか。それ又汝が主の身と。汝のもしあ〳〵ば。江及紀音寺の猿と
到りく。ふぶ子どもの書を贈り。
〳〵ちかさとる者を。奮然と立て羽〳〵立ち〳〵ほとを身色と足をれば。
ふく感激。さそいろ者。猶縁をぐさまあらばとて。
一朝を引ちく。父ち郎五が死をとる。雷神がる。又悔く嫂蓮
葉を殺し。ひとくを言説をとれ。を殺し。罪を贖ふ。水書写め。
ふくの子どる。父が今般の甲人察し。賊頭陀雷神を殺して寃を
晴め。彼が舊の名は西神とし。明〳〵とぞ。年の齢ひまぐ三十に至らぐ。
親は箇様くくり。と言まよ。ふを記し。堅く巻とめく。寃の足と
ひけん。ゆぐく足度を解捨く。鳥の隨意放ゆとば。寃る

うち〳〵蒼天より飛揚して。雲より紛まぎれ失うせぬ。武章はちぐ〳〵
うち瞻まもり覚悟とし。今はいかで安〳〵とて。あるじより驚ぎて
気色もなく。まづ近隣徒より告ちじて。領主へ訴をやさんとて。
直ち外面へ立出でぬ。憐べし。武章は朴實なれ。寃抵を世を
狭く。又恨うらむ嫂を殺せり。豈是宿因の業果なるべや。されば蓮花
は。日来夫を偏りて。ひとり武章を調戯し。ゆゑ〳〵び雷神より環會なり。
不良のうつろ狐發せり。天その不貞不義を憎まず。忽地に罰し
給へり。故あるなる雷神が墮落なるも。彼が奸汁より起れり。又
毒婦。まづ〳〵夫を毒殺せんとすれども。ふり落なる狂婆蛇なり。
さふ立あるべく死にたるべし。その罪脱れがたきに似たり。たとへども徒
幸みなし武章に殺され。意中の復讐汁に及ばざるとなり。

汚れてうれども。彼を手ぶ。実に一大幸なり。又たゞ五戒業は六斗
既に半百に及びぬ。されあれ似げなる偏婦を娶りしかば。
面叱せられ。禍遂にその身に及ぐり。夫婦は人の大倫なり。縱主人に
とも。思慮あるべく度も固辞べきなるに。玉を抱き罪ありとなん。
常言にいはく。又雷神は。奸悪を逞しくして。里人を送り。
一日にして雲の富をうしなひぬ。ひとり祝ものゝ武章は香破せ
ず。喪家の狗とまぬかれる。亦是神仏の冥罰なり。天網疎にして漏さず
ず。今その四人を論ずるに。武章のみ絶き罪なり。罪なして罪を
犯すぞ。過世の業因なるべし。去りとはいへども。善報なるべし。
その子なれば。孝を拒。家を起さんなる。疑べし。善の
悪だにあるべしと。悪の善あるべしと。とかくなるべし。

青木

雲妙間雨夜月巻之四

東都　曲亭馬琴編次

第八套　倭文手の雅鷹下

木賀十郎光輔へ。伊原武章がみづから罪を祈まうしたり。大ぶ驚たまふ。

ずこれを拉ぎ獄にくだす。家隷直利長綱とらふのを。太郎武章が宮へ遣

を考るふ。その畢は三世仲法師ハ。ずれの悪僧おろく。武章

宿恨あるものゝ。件の悪僧ゆゑる年。近江國小幡の河九物の恵つかまつ

騙りしうり。遂に寃枉ふ係りく。武章が妻非命に死にふりめ

ぐる又いくその艱苦を稟。ふるふ武章くるも昨夜武茶が家

到りく雷神に撞見。これを驚んとるふ。彼くや燈燭とうく

闇夜に紛れて逃げ去りぬ。追捕の使ひ誤て嫂蓮華ふ[illegible]
立地にその命を絶りぬ。されば白の罪は悔て詮なし。只願くは雷神
を宮に追留さ。武章が為に冤を雪がんのみ。うかく恩恵を垂下
し耳元にとべ〻こそ書さうろ。光浦は元来武章が才を愛し深く
ちうべのの為体を同考ふに惜し。且利長綱をうく。雷神が授方と
拝宮さるに。雷神はさ〻ろ。白雲黒雲も。夜の中に逐電しく往方
定うるところを。光浦笑て。ちうるとこは武章が弘法言ふ〻く
取用もべし。彼法師が日乗の刃ひざ〻。里人ホこそうく〻ろ。呼び
集合て同考ふに。長綱これをうけ〻ろ。鷹に彼山院に祈ちうた。里
人ホを呼つ〻。この二件のうと説ちて。雷神が人とうう。又彼寺の
住持ちうる[illegible]終を同じ。里人ホは彼悪僧に魅られて武章

を[illegible]憎[illegible]。[illegible]先住の冤魂を消度せ。景延を速に願ふ道
徳を讃[illegible]。吾们彼清僧の雄弁をもつてとらへ。その法験
の灼然なるに面あてうるところ。況て日乗柔和忍辱の雲[illegible]も
邪淫貪婪の刃ひう。[illegible]ホ武章。恨るのあり。嫂を救し。罪を雷神
法師に假托て。命を助られと計るの欲。ちう私に彼清僧。ふうの徒
才をるに。[illegible]地にもうくうせのひ〻ハ。豫て抖藪の宿望を果さんと
ホ[illegible]。[illegible]山院にとるの気[illegible]が今武章とその黒白をひ
わ[illegible]人もちうと[illegible]。迹を埋ホうとと異口同音にうとも
長綱とのハち。里人ホがうに統を主君に笑えの。[illegible]光浦ひ〻せ[illegible]
不便うう武章ハ死刑に行ふべ。ちうハ且彼も由緒ある武士の黒ち
縛首刎ん[illegible]ハ特ハ[illegible]古来ちうし。無後寺[illegible]。腹を切らべと仰

る祈ふ直利長綱が生命を武章に伝へ[illegible]。既にその浜備をいふ。頃[illegible]日三月の中旬なれば、[illegible]山邦の櫻花、爛熳として誰をまつ[illegible]哀れとぞ。かくてその間とりは敷皮布にて木の間木の間に白花幔幕を張らし、[illegible]怪の雑兵五六人、武章を守護し、引き敷皮の上にまうでるふ又一人、白木の小四[illegible]刀を載せ、くその前に居直利長綱床几に憑りて、正面にあり。雑兵[illegible]左右に列居て、非常を警るの。いく嚴重なり。武章は浅黄上下被て、髪を切てうちかたくふ臆して、長綱に対て領主の恩恵を礼謝し、たちまちに坐を白く、徐に襟を引て[illegible]錯の兵士、切靴ちらる刀の目釘を湿し、そ[illegible]直利長綱は、武章に対ていふ。[illegible]辺今度の災害は、主君木曽殿[illegible]めとして長綱亦[illegible]至るまでぐ[illegible]と惜[illegible]

心操の健気なるをかくのごとうづ推量てこそひのび遺をつのもあれば、何ぞ[illegible]れ笑えのくとりふ武章、茶くこの刃薄命なり終に平生の志を演ず及ばざるは盛毒ふ命を隕し。おのれ又[illegible]を恨くは悪傷雷神を走らして生るべくその穴を喰ざるべけれも又審みのひがに近ふ残しあるを子どもらなるべ。さてぶみをかくるのうふ。彼ホ幸なる人の庇を受されば道路に餓死をすることもいふまん。被ホり。今日のうを倩笑。この地へ来るるあらば嚴則の為体を笑えまし。怨敵雷神がゆくへをたづねば。又母の讐を報ひくく係累の[illegible]を雪ぐべ。と言告ぬるべ。とい長綱なく委曲その意を[illegible]心易れと應つ。頻に涙うちうるみ。雑兵ホに至ることぐ不覚に油儒らしけり。[illegible]春の夕れみ入相の鐘ゆくぐと霏くと降か[illegible]

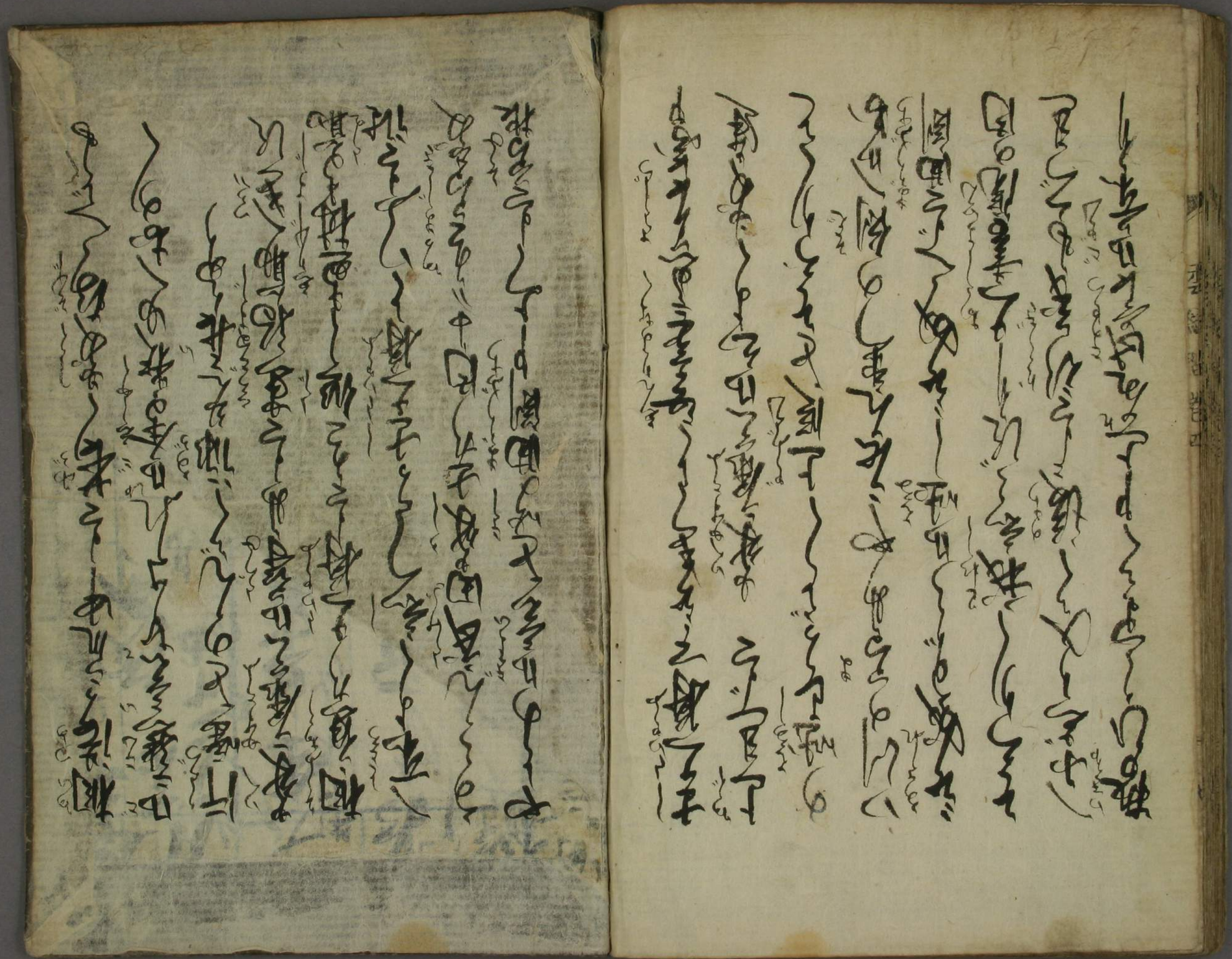
雪吹とのうるもふ。今ぞ消ゆ〳〵武章が。氷の双押戴を仗借のひとらひも
あへど。唯ゆの肚へ突立てうり。浩而よ。才賀の近臣汗馬よ鞭を鳴らして。蔓
直よ馳ら〳〵ま〳〵門外よ馬騎てるらて。境内よ走り入り。かゝとうえて大よ
驚を。領主の命あり。忘ぞ〳〵刀を引よ後ひしゆひそとゆびうけて。端
河とり近く走り来る。長綱よ射ろいゆう。主君僕をゆう〳〵武章よ向ー
のふすのあり。綽急ゆれば。直よ同べくやとりふを。長綱ゆものいどほ細ふ及
いどゆ。ろ〳〵と應〳〵べ。近臣聽ろ〳〵武章が耳よ口をさ〳〵ゆ。鷹飼ろ
るのハ。辺の兄太郎五武兼。その奥妙を究うるふ。近曽頃死〳〵。後ふ
これを受伝るのう。就中。傷つたる鷹を療治るの奇方ふ
至〳〵うぶく亡んるゆ。いと歎ろ〳〵。辺その舎弟〳〵。柔石ゆる而あうゆ。
言を借ぶ〳〵後世ふ伝るふ。その孟充是〳〵かんとの由を問ん

為よ。領主の命を稟ろ〳〵ふ来よろ。回答を受ろ〳〵とふ。武章ふ之
ア〳〵。答んとるふ。神既よ悩乱ふ。数回息を吹ふ声をふり立てふ
ゆう。奇怪の技ゆ。ろのよ好ぶるを。後〳〵ゆるところ臣ふ武兼ふ。その術
の伝んるを厭ひく。書留るゆものあ。ふうよゆ。伝へ進らるるよう〳〵。
ふうとゆ。ぶ兄久〳〵領主の庇を蒙り。ふのよ又兄が恩賜の雪の山
の名よ托〳〵。書を子どもらふ寄うるゆものよ。いぶ。ろ等雨よろひ
ゆ。武章が後よ。実の汚名を雪めふ。ふうの子。彼悪伯よ環
會ふ。讐を報ふゆ。今ふ。ふ七日が間よ。武章が墳墓の傍
よ。昊艸忽地と生ぶべ。それらそ奇るの妙茅ふ。ふろ〳〵ゆ。ふと
いひ果ふ。突立る後刀を。雄よのゆ。引後ひ。後ふ仗借とい。声と共
ふ首ハ前よ落。軀ハ俯よ倒ふる。時よ享年ハ十餘歳ハとふる

ぐこと齢ありかりしを長綱は武章が屍を名寺の墓所に瘞
まつ。さて里人ホを悲しみ哭す。その所を悲び哭す住の空院とあらられ。
汝ホうるるくられを獨子の。武章が土饅頭の泪うるめられ
ざる艸の生出るのあらば。告ちるべしと。遂に近臣とも
立ちくるる。主君光浦に武章がひつるの。一五一十を演説と。光浦ひ
るるべく嗟嘆し。ふくるる失ひるる。家を楽うべ考えるるがさう
もとひるる。次の日うる。毎日に近臣を召名寺へ参らる。武章が墳
をうんせるるる。第七日の朝そぐるる。番守の里人立うるる。所ずるる
事。吾僧隊ら厳の仰を禀る。日々に武章が墳をちりてゐる。
暁夜ぶ一夜の中に彼墳うる。異艸生出し茎の長ぐるの一尺
五六すよるび。雉紫萌茂り。花開るいと匂ゆるる。隙るるるる

るると仰もるるるる。立うる糸まるるる。光浦れを見て武章が
誓言空しうるぐ。れゆるる面のうる鑒定ぐ。るる馬を牽ぐ
るといそがつ。直利長綱以下。五七人の近臣をおる。馬ようる
件の里人に郷導ぐる。里名寺に到る。主従その草を見る。
茎は細くして長高く。葉は汀原柳に似て四方うる牛々相対ひ。茎
の大サ一寸四五分もめぐる。葉の際うる小枝を生じる。黄なる花開
るる。光浦はくと見る。妙なる嘆賞し。長綱を見るるるてられる。武
章は蓋世の武士なる。只武勇が為に。庇護の恩を報んとる。今般
に一言を遺し。身死しる鷹の妙薬を作ふれ。常に愛るるる弁切艸
るるべ。むし人皇六十五代花山院の御時に。鷹飼晴頼といひる
あり。業に細しる神の如し。鷹の傷つくるるる草を採て

これを伺ふ人草の名を問ふ。和尚いはく。そもそれは家者露これを
せずば。晴頼怒りてその茅を殺せり。されば昔時の人。奢の良茶を
しらざるなり。その草を名づけて。茅切草とよぶとなり。されば今の人は草の
のみをもつて。その形状を審にせざるゆゑ。或は茅切草は紫苑なりと云ふ。今
これを見るに紫苑よりは。晴頼はその家方をもつて。必ず茅を切害し
これを用ひの殺止ぐべし。武茶が才を切らしめ。この異草を行くべし。鳴呼才切
草の名。誠あるべし。憐れべし。武章。寃苦を抱き。終に仇を復せんとす
ど。一朝殃を釀しぬ。非命に死ども。偏るべし。況が爲に恩に報ぶ願
奇なり。疑らくは里人ホ。彼雷神に祈れども。惑ひぬ。武章一定
逝るの扶けと不審とす。その言いまだ終らざるに。忽ち一人の形
儀。二人の俗客を伴ひ。門内に入り。[illegible]

の外ふ音の荒さまとの人光輔主役里人ホこの声を聞て不審
に首を回らしてその人を見るに。曩に逐電せる。学名寺の後住
なりしが里人ホ冷笑ひ。貴僧はいまだ年。先住の寃魂に惑ひ。
ひしへなりしが。何の顔ありて。門容をとなりなるひとる
と問ふ。後住の法師。驚愕らく。小僧愚なりといへども。一院の住持
たり。いかぐ女子に亡魂に驚かされ。不覚の挙動をいたすべき
ものあれ。早急に帰り。入に告るふ及ばず。出でいかり。殿の月代
行くをのみ。さもあらんも理なり。今殃をとらを笑く。疑ひを
あべと回答つ。光輔がはなり近くに対ひ。愚僧當院に
住持しいく程もあるべ。されば。領主の見系に入ぐ。去年に師
迂化の後。彼弥同宿ホ。ものが隠慝の覆覚人と阻く。種々の流言

をうく。その非を掩んと計校。先師の寃魂。夜ゝ顕き生ると
いへども。狐狸の弱き者共あり。そのころ。さる怪異生ずるよりかゝてお[illegible]
同宿ず。先師年来の苦心を積み。石壇彼造の為に。檀越布施の金銭
を人に預もつて手形を盗とりて逃去ぬ。ゆへに愚僧
先師の風志いとゞ[illegible]を歎き。密に彼軍が往方を探問に。一
人の伝聞。近き山里に躲居るよし。伝聞その虚実を糺ん為に。
里人ずゐ生ずる。只ちとその所に到りてある人を問ふ。その人答て件の
伝聞今朝甲斐国へとく。旅ごろつぷ追蒐ものぐ逢ものんと
いへ。愚僧これをとくとろ頻りに忙しく。ぬるびちるまゝ。ぞうぞ
ものゆるくとく。甲斐国なる。墓ヶ原とぐ追到り。彼伝聞が幽死山寺
不寄宿ものと辛ゝ[illegible]。縁故を問詰れども彼の